

学校法人 米田学園 米田柔整専門学校

学校関係者評価報告書

(令和2年度)

<<評価項目一覧>>

- 1 教育理念・目標
- 2 学校運営
- 3 教育活動
- 4 学習成果
- 5 学生支援
- 6 教育環境
- 7 学生の受入れ募集
- 8 財務
- 9 法令などの遵守
- 10 社会貢献・地域貢献

令和2年度 学校関係者評価委員会報告

学校法人 米田学園 米田柔整専門学校 学校関係者評価委員会は「令和2年度自己評価報告書」の結果に基づいて学校関係者評価を実施したので、下記のとおり報告する。

1. 学校関係者評価委員

業界関係：森川伸治

卒業生：杉浦光幸

加納功詞

有識者：森 虹輝

2. 令和2年度 自己評価に対する学校関係者評価

評価項目	評 価	評価に対する今後の学校の取組
教育理念・目的	今年度の学校パンフレットは非常に内容が良かった。トレーナー、医療、介護、病院との連携など柔道整復師の多様性がうまく表現できていた。しかし、その中で学校の理念が見えてこないことが残念であった。佛手仏心は意味がわかりにくい部分も多く、トヨタで言えば、多くの企業理念がある中で社長の「もっといい車を作ろう」という一言。ユニクロで言えば「衣料から世界を作ろう」、吉田松陰の「もっと日本をよくしよう」など一言で米田柔整を表現するフレーズがあるとさらに良い。それを学校全体で共有し、学生に浸透させていくことが重要であると考ええる。	佛手仏心はわかりにくい部分も多く、学校関係者の意見にあるように、わかりやすくインパクトのある言葉を模索していきたい。それを職員間で共有し、学校説明会などで繰り返し発信していくことが重要と考える。本質的には柔道整復師として自分の子どもに継がせたいという気持ちになるかという部分も重要であり、我々がそのような未来を示せるかどうかとも問われている。
学校運営	新型コロナウイルス感染症という未知の脅威の中、継続性をもって学校運営していくことは非常に大変であったと思う。その中でも、いち早く遠隔授業を取り入れて学生の学習の機会を確保できたことは称賛に値する。	今後も新型コロナウイルス感染症の動向を注視し、状況に応じて遠隔授業等、学生の安全を最優先として学習の機会を確保していく。まだオンライン授業による学習効果の判定がはっきりとなされていないので今後振り返りを行って、遠隔授業の質向上にも努めていきたい。
教育活動	施術録の記載を徹底することが臨床現場では重要であるが、なかなか浸透できていない現状がある。学生のうちから徹底して施術録を記載することの重要性を教え込んでいただきたい。 地域感染レベルに応じてフェイスシールドなどの感染予防具を用いて実施できる範囲を見極めて実技授業を行っていたことはご苦労であった。どこまで実施可能かという線引きはなかなか難しいと思われるが、学生の安全を確保した上で、本校の特徴である実技を実施する時間を今後は増やして行って欲しい。	臨床実習や実技を通して、施術録の記載に関しては繰り返し指導し、施術録を記載しない方がおかしいという常識を刷り込んでいく。 今後は単純に対面に戻すのではなく、遠隔授業のメリット(繰り返し動画をみることができる)なども十分に検討して、ハイブリッドな形で学生にとって最適な形で授業を展開していきたい。実技に関しては積極的に対面で行っていきたい。

<p>学習効果</p>	<p>再試験制度を導入して1年時での学習の遅れによる早期退学に歯止めがかかったため、ここ数年は退学率が減少していると聞いている。入学したからには最後まで学生の面倒をみて最終的には国家試験合格までもっていける体制づくりは必要である。入学志願者の増加とともに学生の質向上に努めていただきたい。</p> <p>第29回国家試験において事務手続き上の誤りにより、一部学生の国家試験受験が無効となった件に関しては早急に手続き体制を見直し、再発防止を心がけていただきたい。</p>	<p>退学率の減少は再試験制度とともに1年生を中心とした教員のきめ細やかなフォローアップも要因の一つと考えている。ただし、学力の低下は歯止めがかからない状況であり、柔道整復師のやりがいを伝えてモチベーションアップを図っていくことが必要である。最終的に国家試験の合格率が下がっていくことは学校としても絶対に避けなければならないと考えている。</p> <p>また、国家試験の手続きに関する再発防止策としては、業務マニュアルを見直し、国家試験に係る事務の手順を明確にする。国家試験に係る提出書類については、複数の事務職員で確認する体制を確立した上で、校長が最終確認を行うこととした。さらに国家試験に係る質問事項を財団あるいは厚生労働省に行う場合は、担当者は事前報告ならびに事後報告書を作成し、校長に提出の上確認を行うこととした。</p>
<p>学習支援</p>	<p>世間ではipadなどの電子媒体が普及しているため、電子教科書なども検討してはどうか。今後遠隔授業が行われると想定するとスマートフォンの画面で授業を受けるよりはipadの画面で受講の方が効率がよいと感じる。</p>	<p>現在は小学校でもタブレットが配られているが、今の高校生はまだそこまで適応していない。学生も紙の資料を欲しがるため遠隔授業になっても配布せざるを得ない状況である。どのような環境でもやれる学生はやれるが、そうではない学生にどう対応していくかが課題である。電子教科書は引き続き導入に関して検討は続けていく。</p>

教育環境	<p>感染対策として教室の机を一定距離離し、ソーシャルディスタンスを確保し、ホールにおいても一方向の机の配置を行い、対面を避けるようにした。学内における水性石鹸やペーパータオル等の手洗い環境整備、教室内アルコールタオルや備品消毒の整備、アルコール消毒環境の整備等を行った。その他、学生配布用のリーフレット作成と改訂、予防ガイドラインとガイドラインに係る行動指針の作成と改訂、実技実習の方法に関する指針の作成等、地域感染レベルに則した予防活動につとめたなど新型コロナウイルス感染症に対して適切に準備されていることは評価に値する。</p> <p>トレーニングルームが改修されたことで利用者が増え、学生がトレーニングに興味をもつことは非常によいことである。</p>	<p>感染症対策は当分の間必要になってくるので、学生には医療従事者レベルでの衛生管理意識をしっかりと植え付けていきたい。トレーニングルームに関しては柔道部だけではなく一般学生の利用が増えて、トレーニングや体の仕組みに興味をもつ学生が増えていくことは非常に有益なことだと考えている。</p>
学生の受入れ募集	<p>柔整を目指すきっかけがスポーツであることが多いため、導入としてスポーツトレーナーは悪くはないと感じている。柔道整復師の知名度は決して高くないのでスポーツが好きな方に広く知っていただけるような取り組みも業界としてさらに行ってきたい。米田柔整専門学校の入学生として相応しい方を選抜して、将来業界及び社会に貢献していただける人材の育成をお願いしたい。</p>	<p>現在は募集戦略の一環としてスポーツに興味がある層を狙ってスポーツトレーナーというフレーズを軸に広告をしているが、柔道整復師の本質を表現しているわけではない。柔道整復師は開業できる資格であることが一つの強みであり、どのような将来像を学生に示すかが問われている。従来は外傷に強いことが売りであったが、さらに基本である運動器の解剖学を広く深くしっていることが米田柔整の学生の質を担保するスキルとなることも進めていきたいと考えている。</p>
財務	<p>近年、入学者の減少が続いていたが、再び増加に転じていることが何よりの好材料である。まずは定員を満了形を継続して80名入学の80名国家試験合格を目標に進めていただきたい。</p>	<p>定員をしっかりと満たすと同時に質の良い学生を輩出する目的に見合った入学生を選抜できるように入試体制も含めて再度検討していく。</p>
法令などの遵守	<p>遠隔授業などでは著作権の問題も取り上げられているようである。世間の動きに注視して、法令順守に努めていただきたい。</p>	<p>著作権に関しては公衆の電波に乗せるのと学内で授業を行うことでは対応が変わってくるようである。今後適切に情報を集めて対応していきたい。</p>
社会貢献	<p>特別なことではなく、小規模でもよいので地道な社会貢献活動の継続を実施していただきたい。</p>	<p>新型コロナウイルス感染症の影響で地域清掃を中止していたので、今後感染が落ち着いたら再開し、社会貢献の一部を担っていただきたい</p>

【総評】

今年も新型コロナウイルス感染症に対する対応に多くのエネルギーを費やしたと思われる。その中で学内でのクラスターが発生しなかったことは学校の感染症に対する取り組みが適切に実施されていたことが大きく、評価に値する。授業においても遠隔授業を積極的に行うなど、変化に対応する姿勢が見受けられた。この状況はまだ続くことが予想されるので学生の学ぶ機会の確保に向けて知恵を出し合っ
てほしい。国家試験の手続き上の誤りは業務体制を見直し、速やかに対策をとっていただき、今後同様の事例が発生しないように改善を進めていただきたい。学生募集はスポーツトレーナーを軸に軌道に乗
りつつあると感じた。今後は柔道整復師の本質を追い求めるとともに、柔整の多様性に対しても理解を
示し、様々な分野で活躍する卒業生と連携してよりよい学校を作っていただきたい。柔道整復師を取り
巻く環境は厳しい状況であるが、まずは施術録の記載の重要性をしっかりと訴えて欲しい。学校関係者
委員会としては施術録に記載する当たり前のことを実践できる学生を輩出することを切に望んでいる。